

地域名称の指す空間的領域に関する研究

小島哲哉・貞広幸雄・浅見泰司

A study of spatial area indicated by place name

Tetsuya KOJIMA, Yukio SADAHIRO, Yasushi ASAMI

Abstract: The spatial areas indicated by place name vary between individuals. Those areas are different from the district name which administration sets. The areas, which people imagine for place name by questionnaire survey, are visualized and classified with GIS. Comparing with administrative areas and distribution of place name used in building name, we clarify the factors which affect spatial perception to place name.

Keywords: 地名 (place name), 空間認識 (spatial perception), 建物名称 (building name)

1. はじめに

人々の頭の中では、地名が空間的に影響を及ぼす範囲が明確ではないにしろ存在しており、その範囲は日常生活で目にするもの等によって影響を受けていると考えられる。本研究では、このような曖昧な領域の範囲、形成要因を知ることを目的とする。

都市、地域のイメージに関する研究の先駆けとなるのが、1960年に発表されたケヴィン・リンチの『都市のイメージ』である。その後も数多くの研究がなされている。五十嵐（2002）は、イメージの中身に着目し、ウェブサイトの飲食店の情報から地域イメージの可視化を試みている。また、仲間（1994）は、地名呼称の分布から地域イメージの形成要因を明らかにしている。しかし、これらは都市施設や建物名称から地域イメージを得られるという仮定に基づいたものであり、頭の中での地名の指す領域を対象とした研究は少ない。

地名の指す空間的領域は、(1) 地形、土地利用、

景観の連続性といった空間的なまとまりの影響、

(2) 道路や線路等の線的施設や大規模施設の影響、(3) 来街頻度といった個人属性の影響、(4) 住所や建物名称といった名称による一体性の影響の4つが影響を及ぼしあって形成されていると考えられる。本研究では、頻度分布図の作成、クラスター分析による分類、建物名称分布との比較という3つ分析を通して、仮説の検証を試みる。

2. 分析のためのアンケート調査

研究対象として豊島区内にある豊島、池袋、目白の3地名を選定する。豊島区の住民に対して、2011年10月24日～11月18日にかけて、3地名に相当すると思う範囲を図示してもらうアンケート調査を実施し、14～75歳の男女45名から回答が得られた。

3. 分析

3.1 頻度分布図の作成

池袋については、住所名に入る地域のうち、池袋と認識される領域の平均割合は37.5%であった。中心部の池袋駅周辺が最も多くの人に池袋と認識され、遠ざかるにつれて単調減少している。東

小島哲哉 〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

Phone: 03-5841-6259

E-mail: kojima@ua.t.u-tokyo.ac.jp

部はサンシャインを境にして急激に値が低くなっているが、北部や西部に関しては、ばらつきが大きいといえる。

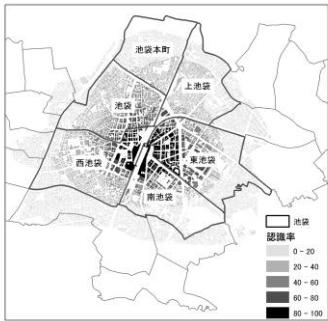


図-1 池袋頻度分布図

目白については、目白が住所名に入る地域のうち、目白と認識される領域の平均割合は 116% であった。目白駅および学習院大学周辺が最も高い値を示している。また、住所上の目白の範囲を越えて、区外である新宿区下落合も目白として強く認識されている。しかし、文京区目白台まで影響は及んでいない。目白は東西に延びる目白通り沿いに多くの店舗が並んでおり、その景観は通りの両側で差は見られない。一方、住所上では目白通りを挟んで豊島区と新宿区に分かれるような構造となっており、このような理由で区外にまで認識の範囲が及んでいると考えられる。

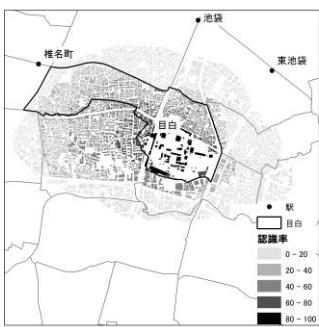


図-2 目白頻度分布図

豊島については、豊島区のうち、豊島と認識される領域の平均割合は 73.7% であった。東部の巣鴨、駒込や南部の高田、雑司ヶ谷の一部は区内でありながらも半数以上の人には範囲には及んでいない。一方、板橋区南町、中丸町は区外でありな

がらも半数以上の人に豊島の領域として認識されている。この地域の区境は住宅街の狭い道路であり、その境は区民であっても厳密に特定することは困難であると考えられ、周囲の広幅員の道路を境界取ったことが要因であると考えられる。

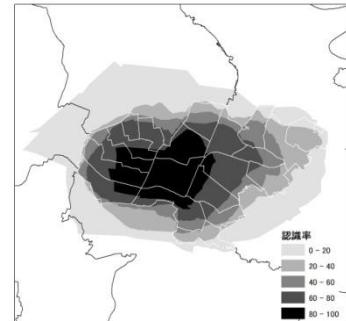


図-3 豊島頻度分布図

3.2 クラスター分析

調査で得られた地名に対する空間認識領域 P_i ($i=1,2\dots45$) から任意の 2 領域 P_i , P_j を選び、その 2 領域の積集合の面積 $S(P_i \cap P_j)$ と和集合の面積 $S(P_i \cup P_j)$ の比を取りことで類似度 R_{ij} を定義し、ウォード法でクラスター分析を行った。

池袋と認識される領域は、3 つのグループに分けることができる。

- A : 住所に池袋という名称が入る地域 (14/45)
- B : 池袋、西池袋、東池袋、南池袋を含む地域 (16/45)
- C : 池袋駅からサンシャインに及ぶ地域(15/45)

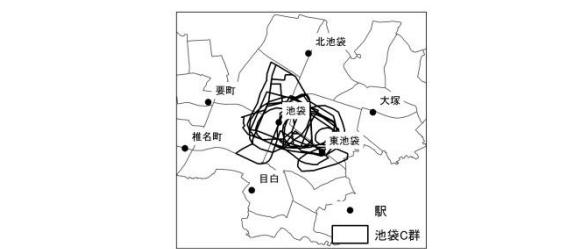
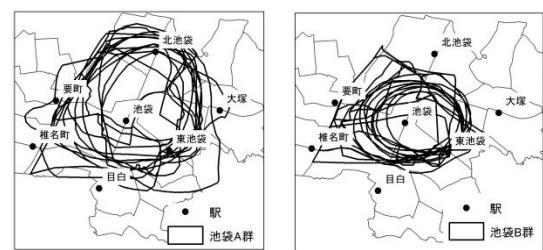


図-4 池袋分類図 A (左上) B (右上) C (下)

違いをもたらすものとして 2 点挙げられる。ひとつは山手通り、川越街道(首都高速 5 号池袋線)等の大通りである。これらは、町丁目の境界として設定されていることも多いため、住所と道路のどちらを境として認識しているかの判断はできないが、道路により認識の及ぶ領域が妨げられているといえる。もう 1 点は、ランドマークである。特に東部は「サンシャインまで含む」という考え方方が強い。一方、池袋駅北口周辺には歓楽街、その奥には住宅街が広がり、東西に比べ利用頻度が少ないため、北部にはばらつきが出ていると考えられる。また、西部には立教大学があるが、池袋の地名との関わりはサンシャインほど深くないことが影響してか、含むか否かの判断にはばらつきが出たと考えられる。また、各クラスター間の個人属性を比較しても大きな特徴は見られず、住民の誰もが強い認識を持つ「池袋」という地名に対しても個人の考え方が強く反映されている結果だといえる。

目白と認識される領域は、2つのグループに分けることができる。

- A : 下落合、池袋、高田の一部も含む地域 (20/45)
- B : 目白駅を中心とした住所に近い地域 (25/45)

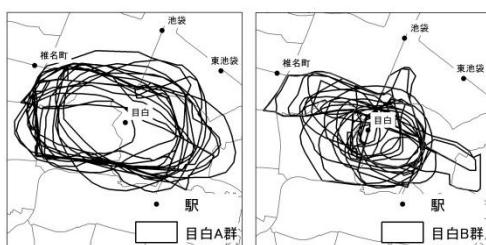


図-5 目白分類図 A (左) B (右)

A 群に属する 20 人中 9 人が豊島区出身者、一方 B 群では 25 人中 2 人だけであった。 χ^2 検定を適用すると、A 群と B 群には有意に出身地の差があるといえる。したがって、区内出身者ほど下落合等の地域を含む広い認識をし、区外出身者は住所に近い、狭い認識をしているといえる。広い認識をする人々はその境界に西武池袋線、新目白通り

等を選択していることから、池袋と同様に、線的施設により認識範囲が妨げられているといえる。目白駅の東、南に関しては、学習院大学まで含むという考え方方が強く出ている。また、池袋と同様、駅を中心として囲まれており、駅勢圏として認識された可能性もある。

豊島と認識される領域は、3つのグループに分けることができる。

- A : 豊島区東部を多く含む地域 (8/45)
- B : 豊島区西部を中心とする地域 (10/45)
- C : おおむね豊島区の範囲 (27/45)

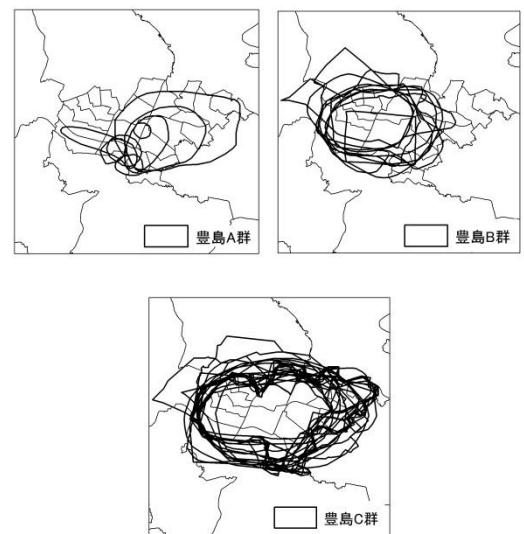


図-6 豊島分類図 A (左上) B (右上) C (下)

半数以上の人人が C 群に属しており、池袋、目白と比較すると認識のばらつきは少ない。また、駒込や巣鴨といった東部の地域が外れるケースが多いが、これは、被験者の多くが西部に居住する人々であり、区名といえどもその居住地により、空間認識に影響が出たと考えられる。

3.3 建物名称分布との比較

池袋の地名が入る建物のうち、90.6%は住所内に立地している。また、池袋 A 群と建物名称分布は、多くの部分で重なり合い、広範囲に池袋を認識している人々にとっての池袋の地名が指す領域と建物名称の分布は近いといえる。

目白の地名が入る建物のうち、住所内に立地しているものは 44.2% にとどまっている。下落合 2~4 丁目、西池袋 2 丁目、雑司が谷 2, 3 丁目、高田 1, 2 丁目では、半数以上の地名付建物で目白の地名が選択されており、目白の地名としての影響力は強いといえる。また、目白 A 群と目白の建物名称分布は近く、行政域を超えて目白と認識されている地域では、建物名称においても目白という地名が多く使用されていることがわかる。

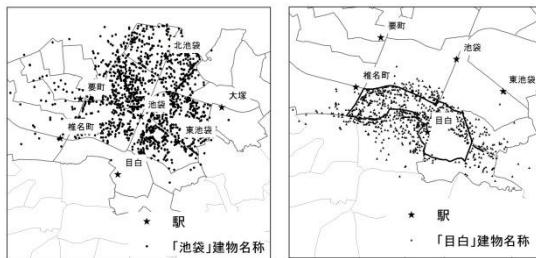


図-7 建物名称分布 池袋（左）、目白（右）

45 人中 17 人に池袋と目白の認識領域に重なりが見られた。その共通部分を取り出して頻度分布図を作成し、建物名称分布と重ねると、認識領域の重なりが見られる範囲において、目白と付く建物が池袋の行政域内に侵入していることがわかる。また、侵入している建物の 92% が住宅であることは住宅地として目白という地名の影響力が大きいことを示しているといえる。

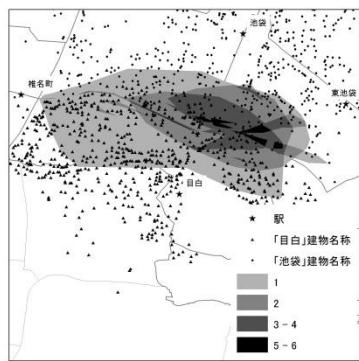


図-8 認識領域の重なりと建物名称分布

豊島は広域地名であり、池袋、目白はその中に含まれるという階層構造をなす。3 つの領域を個人ごとに重ね合わせると、豊島の中に池袋が完全

に含まれていたのは 45 人中 25 人、目白では 5 人、2 地名が完全に含まれていたのは 4 名にとどまり、90% 以上で階層構造ができていない。住民にとって両地名は豊島区内の地名であるという認識はあると考えられる。本調査では、縮尺の違う別々の地図を用いたために広域的な意識とのずれが生じた可能性があるが、被験者が池袋、目白を豊島区内の地名であると認識しているという仮定の下では、階層性が弱くなっているといえる。

4. おわりに

本研究では池袋、目白、豊島の 3 地名を対象として、地名の指す領域の分析を行った。目白では目白通りという空間的なまとまりによって認識が形成されていること、池袋や目白では大通りによる妨げが生じ、ランドマークの立地と地名との関係の深さにより範囲の拡大、縮小が起こることが確認できた。池袋では個人属性による差は出なかつたが、目白では出身地による差が生じた。また、空間認識と建物名称分布には類似性があることが確認できた。

本研究では、現時点での領域を対象としたが、空間認識は街並みの変化等によって影響を受け、同様に建物名称分布も変化をしていく。行政域も、市町村合併によってその領域に変化が生じた地域はあり、本研究に時間軸を設定し、その変遷を見ることで、空間認識に影響を及ぼす要因をより詳細に知ることができるであろう。

参考文献

- ケヴィン・リンチ著、丹下健三・富田玲子訳 (1968)：「都市のイメージ」、岩波書店
- 五十嵐良雄 (2002)：都市における地域イメージの可視化システムの開発、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士論文
- 仲間浩一 (1994)：地名呼称の分布にみる地区イメージの伝搬に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集、607-612